

UIFA JAP●N

NEWSLETTER

■主な内容

役員会の報告

'98 UIFA日本大会実行委員会打ち上げパーティの報告

ド・ラ・トゥールUIFA会長と再会

UIFA大会とブルガリアの4人とのホームステイ

新会員の紹介 その2

新シリーズ この指とまれ

■ 役員会の報告

第6回役員会（98年10月3日） 役員9名出席

- ・ド・ラ・トゥール会長他、日本大会に対する感謝状等が世界各国から寄せられている。また、会長・副会長・実行委員長等による「お礼参り」でも概ね好評。反省もあるが大成功裡終わったといえる。報告書の作成委員会構成メンバーを決める。
- ・「大会で約束されたことの実現」「理事会の活性化」「世界との交流」等今後の問題については意見も出たが、結論は急がず時間をかけて議論を重ねていこうということになる。

第7回役員会（98年11月19日） 役員10名出席

- ・作成物スケジュール（収支報告先・報告書提出先と期日・作成物作業別日程等）の一覧表の確認。報告書・展示作品集の作成メンバーの確認。
- ・「UIFA'98日本大会報告書」構成案（内容・頁数・材料・担当者・催促者別一覧表）及び台割一覧表の確認。約120頁の予定。
- ・これまでの会計報告書が出される。事後処理人件費等11月末迄に決着のこと及び会計監査担当（中原・小川・安藤）が決まる。

第8回役員会（98年12月14日） 役員10名出席

- ・報告書・作品集の印刷部数の検討の結果、各450部印刷。配布先は議論の末、本部・実行委員会・支援団体・個人支援者・助成申請等営業用・会員の割り当てが決める。
- ・収支報告は11月30日現在の一覧表が提出され、97年4月1日より98年11月30日迄の中間収支状況を正しく示しているとの会計監査委員会の監査報告がなされた。（本報告は平成11年3月末）剰余金については、「剰余金管理委員会」をつくり、検討することに決まる。

■ '98UIFA日本大会実行委員会打ち上げパーティの報告

おもてなし部会 唐崎久子

昨年12月19日（土）年末にしては暖かな夕暮れだった。

美しくライトアップされた天王洲アイルの運河沿いにある「T・Y HARBOR BREWERY」で、午後6時頃から、第21回実行委員会を兼ねた打ち上げパーティーが開かれ、会長はじめ34名が参加した。会場では編集委員会作成による大会報告書が配布され、隣室で約30分程度に編集された大会記録ビデオが紹介された。ビデオに写る参加者の生き生きとした表情を見ると、準備に費やした時間や労力が報われるような思いがした。ビデオ終了後は松川実行委員長長の進行により、各部会からの報告、中原会長からご挨拶をいただいた後全員で乾杯し、懇談へと移った。南欧料理を頂き、各自歓談したり、テラスに出て運河越しの景色を眺めたりしながらUIFA会員北島さん企画計画の地ビールに舌鼓を打ち、楽しい一時を過ごした。

続いて、実行委員からの感謝の意を表し、中原会長、小川副会長、松川実行委員長へ、スウェーデン製のキャンドルスタンドを記念品として贈呈した。あわせて松川実行委員長へは、会長、副会長、各実行委員が心を込めて書いた寄せ書きも手渡された。

最後に、おもてなし部会長により、その場で出席者の皆さんから自由に出していただいた形容詞を、あらかじめ用意しておいた大会全体をまとめた文章へあてはめる趣向の遊びが行われ、「奥床しい」実行委員長長の指揮のもとで、「麗しい」多くのUIFA会員による第12回日本大会が大成功に終わったことを確認し合い、和やかな雰囲気の中で打ち上げパーティーを終了した。またこの日をもって、おもてなし部会の活動も最後の幕を閉じることができ、ホットした思いであった。皆様、本当にお疲れ様！！

■ド・ラ・トゥールUIFA会長と再会

UIFA JAPON 副会長 小川信子

98年10月27日ド・ラ・トゥールUIFA会長と再会する約束に合わせてサントノーレ通りのホテルに着いた。赤い車にシャネルスーツを袴に着こなした会長は大会の時とはちょっと違う趣であり、すてきであった。ワインを頂きながらの食事の楽しみ方も教わった。そのとき、日本大会のお礼と伝言をお渡しし感想をうかがった。「準備期間には松川実行委員長と連絡し合いながら進めていた。結果は満足であり、非常に良かった。参加者全員が日本に感謝していると思っている。会場は環境も良く宿舎と一緒に行動がまとまった。発表時間は短かったが皆が発表できたことは良かったと思っている。全体的にも充分検討されていたが時間的にはややタイトであったが、横浜のシンポジウムは市民参加もあって、市民や市長さんにもUIFAのことを理解していただける良い機会だったと思う。興味のある街だったので散歩する時間があって良かったが、もう少し見学でき楽しめれば良かった。しかし、大成功だった。

ポストコングレスツェについては、参加者から良い企画であったと手紙がきている。日本のユニークな文化を吸収できて非常に良かったと思う。全体的に心を開いて交流できたと思う。いつでも今回のようにいかないが、今回はハートのある大会だったと思っている。日本の皆さんに心より感謝していると伝えて欲しい」とおっしゃって、そして、次期大会が成功するように協力してほしいと希望を述べておられた。また、フランス側の協力者には会長からお礼を出して下さっていた。きめの細かい心遣いと行動力を改めて感じるとともに、このエネルギーがUIFAをここまで育て上げて、世界の女建築家たちを繋いできたものと思われた。

日本の皆様よろしく！！とメッセージを残して、さっそうと赤い車で夜の街に同化していった。

パリ在住の岡本由梨さんが通訳を引き受けてくれた。



■UIFA大会とブルガリアの4人とのホームステイ 竹田恭子

永年の夢でしたUIFA大会の日本開催が実現し、終わりました。

デンマーク大会に参加し、まるで私たちが所属している女性建築技術者の会（女技会）のようなUIFA大会が日本で開催されるのを心待ちしてから、何年がたったのでしょうか。

UIFA JAPONが発足してから病気になる前は、今回のUIFAの大会は、横浜シンポジウムのみのお手伝いでした。しかし、参加するからには、どっぷりとつかりたく、花設計工房のこと、女技会のことを発表し、またホームステイを引き受けることにしました。私の仕事場の花設計工房の事を発表するために、事務所でも何回もミーティングをして、まとめ発表したことが、海外の人に共感をもたれたことがとても嬉しく思いました。ホームステイの方は、最初は自宅で1人か2人位と思っていたのですが、私の母がアルツハイマー性痴呆症となって、4月施設に入り、母の家が空いたので、急速、荷物を整理し、リフォームしてそこでブルガリアの4人のホームステイを迎えることになりました。その家に私も行って、一緒に生活することになりました。

実家は、築35年の在来工法の木造二階建、木製建具が残る民家調の住宅です。クーラーがないのでどうかと思っていましたが、開催中は、余り暑くなく助かりました。彼女たちが来日するまで、何語かも分からず、不安でしたが、ブルガリア大使館にいき、資料をもらい、会話集をお借りしてきました。箱崎へ、ブルガリア語のドブレー・ドーシリ（いらっしゃい）をコピーしてお迎えにいきましたところ、ブルガリア語がわかったのか、にこにこして手を振り出てきました。地下鉄の中から質問攻めなナディア(Nadia Stamatova)さんは私によく似た好奇心のいっぱいある性格の長身の建築家、カーティア(Katia Anguelova)さんは、落ち着いていて、相手をよくみているしかりしたシックな建築家、ナディアさんと組んで仕事をしています。アントニア(Antonia Nikolova)は、カーティアの娘で、建築を学んでいる18才の大学生、彼女は中学生の頃、数学でブルガリアの一番だったとか。リリナ(Liliana Atanassova)さんは、おちついた、ガーデン好きな建築家、この4人と私との共同生活が8/31日から始まりました。片言の英語を中心に、絵を交えての会話です。着いた夜は、疲れて寝ているアントニアを残し、私の姉夫婦を交え、歓迎のしゃぶしゃぶレストランにいきました。

お箸の使い方からはじまり、カーティア、リリナは、すぐ上手に使い、幾らでも、肉を食べられるのですが、ナディアは、どうしても上手く、箸が使えません。箸を使えるまで食べないがん張りやの



ナディア、皆が食べ終わった頃やっと使えるようになって、食べ出しました。先に食べ終わったカーティア、リリナがおいしそうにタバコをふかしていると食べ終わったナディアが、なぜ、私だけが上手く箸を使えないのか、わかった、煙草をすっているカーティア、リリナは、二本の指の使い方がうまく、吸っていないナディアだけが箸の使い方が下手なのだとの結論まで言い出すほどの負けず嫌いの彼女でした。その後、スーパーマーケットにいき、明日からの朝食の買い物と見学をし、彼女たちの長い一日が終わりました。

デンマークの大会の時も朝7時頃出掛け、帰りは12時近くのハードスケジュール。今回のUIFA大会も、ハードで、家を7時45分にて、会議が8時30分から始まり、だいたい家に帰るのが10時頃です。朝は、順番のシャワーに始まるので私は5時半の一番には起きだし、すべてを済ませ、朝食を作ります。その後、ナディアがいちばんに起き、洋服にアイロンをかけシャワーに入り支度を始めるとリリア、カーティア、アントニアと続き最後に朝食を食べ、後かたづけをして出発です。夜は、この家に興味がある、リリアさんは、この家のプラン、日本の単位、グリット、畳の寸法等を聞いてきたりします。片言英語と図で説明します。ある夜は、パーティで藤娘をみたので着物に興味を示し、実際に着物を着たりで、夜中になってしまいました。そして、それを明日着たいというのを最後の御茶会のあるパーティに、浴衣を着せてあげる約束をしたほどです。

横浜シンポジウムの前日には、土井さん、(彼女は、4月に私がライトのアリゾナのタリアセンウエストへ土井さんをたずねた折、日本に帰国する予定があるなら、ぜひUIFA大会に参加しないよとの呼びかけに応じ参加された友達)古居さんも泊まりに来て、アメリカのミルカさんとドナーさんと中島明子さん、花の原田愛子さん、山本ヒカルさん、主人とこのブルガリアの4人の世話を手伝ってくれた姉夫婦、隣のスウェーデン人を奥様にお持ちで、現在帰国中の男性を含む、16人でのパーティを行いました。ミルカさんは、ブルガリア出身のアメリカ人で彼女たちとブルガリア語で話し、今回も日本からブルガリアに寄って、一ヵ月滞在し、アメリカに帰国する予定とうかがいました。ですから、特別の思いがブルガリアの4人にあったのでしょう。硝子戸を開け庭と一体化し、室内も引戸を開け、二部屋にまたがり、座卓を並べ、座ったパーティは、日本の家屋の使い方に印象深く感じたのではないのでしょうか。マンションのわが家ではなく、実家の日本の家屋でのホームステイは、建築家の彼女たちにとっては、良かったのではないかと考えています。

ナディアさんは、8日、新宿界限で一緒に買い物をして、夜、マンションのわが家にいらして、主人の作った夕食を食べ泊され、9日の朝、一足先に帰国されました。他の3人は、関西旅行に行き、12日夕方、私は、3人を新横浜まで迎えに行き、そこで、ミルカさんとドナーさんとは、お別れしてマンションのわが家で夕食。やはり、主人の作った食べ切れないほどの夕食でした(主人は洋食が得意なので、外人の時はいつも作ってもらう)。4人で実家に戻り、翌朝13日3人のお土産の買い物に姉夫婦と一緒にいってもらい、14日朝に残りの3人が帰国しました。

いつもわが家にステイする人達は、私の趣味のおセロプレイヤーたちの男性が多かったのですが、その人たちも趣味が同じなので言葉が無くても、用は足りるのですが、今回は、同じ建築家の主婦の人達でしたので、やはり、言葉があまり出来なくても何とか意思が通じ、楽しい毎日でした。私も海外に行くと同じ様に、その国の人がどんな生活をしているか興味を持っているので、彼女たちの気持ちがよく分かりましたが、なんせ自由な時間がなく、それがちょっと彼女たちに、不満だったようでした。駅まで歩いて行ったとき、1時間以上かけ、いろいろの家や、庭の写真取ったりしていましたが、また、駅のそばの文具屋に入って、小さな三角スケールや、文具をお土産に買ったりしてました。アントニアは、同じ位の子供のいる、会員の山本典子さんの家に泊まりに行ったり、私の娘と娘の男友達2人と全部で4人で、デズニーランドに行ったり、洋服など買ったりで、楽しかったのではないかと思います。主人が何が面白かったと、彼女に聞いたら、デズニーランドと言っていました。

今回のUIFA大会の2週間は、海外と違い、日本語が公用語でしたから、内容がよくわかり、その上、普段行っていなかった東京見物も出来、私にとっても、仕事を2週間休んだ甲斐があったほど、とても楽しい日々でした私も、やっと疲れがとれて、次のUIFA大会が楽しみな今日この頃です。

来年か、再来年には、ブルガリアに是非行き、彼女たちの家族にもお会いしたいし、彼女たちの仕事もみたいと思っています。

最後に今回のUIFA大会を手伝って下さった皆様ありがとうございました。大成功でしたね。こくろうさまでした。

私も日本にも、海外にもどんどん友達が増えて、行きたい所ばかりですね。(花設計工房)



■ 新会員の紹介 その2

これからのUIFAをどう活かしていきたいか

栗山礼子



私は9月のUIFAの大会では、ホテングパーティの責任者兼司会という役を担当させていただきました。小さい頃から人前で話すのは大好きで、講演会の時など千人を越す方が嬉しいというお祭り型の性格なのですが、今回ばかりは勝手が違って緊張の連続でした。①仏語・英語の同時通訳が入ること、②宗教上の理由で食物・飲物の配慮が必要なこと、③何人が参加するのか当日まで読み切れないこと、④会場の効果（音・照明）まで自分達でコントロールしなくてはならない国の施設で、建物は立派でも、ソフト面では寮の食堂と思わなくては大失敗しそうなこと、等々の不安要素がたくさんありました。

けれども実際に当日になってみると、1時間はオーバーすると覚悟していた論文発表も棄権した方があったためか、ピタリと定刻に終了。4百人を越す人が楽しんでくださる良いオープニング・パーティとして、盛り上がり、その勢いのまま最終日まで走り抜いた大会になったという印象を持ちました。UIFAは会員の結束という輪の内圧を高めて運の良さまで呼び込んでしまう集団なのだ、連日の晴れを感謝しつつ確信も持ちました。

私自身も論文発表や展示発表に欲張って参加し、各国の強〜い女性建築家に囲まれ、私の作品上での男性上位意識（大きいベッドを男性用と位置づけていた）を指摘されたことが、日本人の住文化を見直すきっかけとなりました。住むという行為は風土・習慣によってさまざまだということを再認識し、地球の反対側で生活する人々のことも視野に入れた活動を、UIFAの輪を活かして続けていきたいと願っています。（栗山礼子建築デザイン事務所）

「レースワーク」が重要

吉田真澄



人が生活する上での重要な構成要素の1つに、建築があると認識している。今、その建築のあり方がいろいろな面から問われているが、最大の問題として環境があり、今回の大会もそのテーマに沿って開催された。

日本の戦後経済の高度成長は、大量生産・消費と使い捨て社会をもたらし、人々の価値観を大きく変化させ、環境問題にも影響を与える事となった。その責任の一端を建築家が担っているのであるが、人はそもそも、都市や建築に対して、何を求めているのだろうか。

それはおそらく、美しさや豊かさ、地域の伝統や文化を保つことに加えて生活に直結した根本的欲求である、健康や心のゆとりと快適な空間、安全な空間の確保にあるといえる。

つまり、これから、私達建築家に要求されることは、エコロジカルで、サステナブル（接続可能）な社会の実現へ、積極的に取り組むことである。そのためには、このUIFAの活動においての、女性建築家の世界的ネットワーク「レースワーク」が重要な役割を果たすと思う。また、私自身の今後の設計活動においても、日本のすばらしい伝統と文化を尊重し、建築と環境の深い関わりを意識しながら、人と心と身体にやさしい空間を考えていきたいと思う。

（吉田デザインコーナー1級建築士事務所）

仕事のエネルギー源となって

田陽裕美



第12回日本大会の準備の途中から参加させていただきました田陽です。松川さんのお誘いで入会致しましたが、そく実行委員のメンバーに加えられ戸惑いもありましたが、横浜部会の福井さん・稲垣さん達の協力を得ながら、与えられた任務だけはなんとか無事終わらせることができたかなと思っています。

大会に参加できたのは、パネル展示への出展と、2日目の開会式と基調発表への出席、そして横浜で開催された市民公開シンポジウムの1日だけでした。仕事を調整して申込みをした世田谷のスタディーツアは、残念ながら人数制限で参加が出来なかったことはとても残念でした。しかし、開会式で各国からの参加の人達と一緒に、ド・ラ・トゥールUIFA会長の親しみがこもった力づよい挨拶や、東京建築士会の女性委員会のメンバーの発表を聞き、国際女性建築会議の一部を垣間見ることができました。

横浜で開催された市民公開シンポジウムでは、当日は昼食や交流パーティーなどの裏方だけで、シンポジウムをしっかりと聞けると楽しみにしていたのが、司会をすることになってしまい気も漫ろで一日が終わってしまいました。今改めて頂いたシンポジウムのテーブルを聞いたり、報告書、資料集に目を通してあの時の雰囲気を楽しんだり、それぞれの担当の方々のご苦労に敬服もしています。

ビジネスとはちょっと違う目線で取組むこうした活動は、どういふわけか仕事のエネルギーの源となって、次のステップを生み出してくれるような気がします。UIFAに改めて乾杯！（建築プラス環境設計）

建築からまちづくり、都市計画へ

松本暢子



昨夏に開催された第12回大会のスタディーツア（墨田区京島地区）は、わか国有数の木造住宅が密集した人口密度の高い地域です。こうした密集市街地の住宅・住環境の改善、特に高齢者の居住実態と住宅更新（建て替え）状況の分析を目下の研究対象としています。

1983、94年に墨田区東向島で居住実態調査を行った経験から、95年には京島地区まちづくり事業の現況報告調査（墨田区）に参加し、今回、墨田のスタディーツアの企画・運営の一端を担うこととなりました。当日は、見学に関するレクチャーに始まり、1時間弱とはいえ参加者ともども下町の街並みを歩きました。住民や自治体の方々など多くの協力を得て、無事終了しました。参加された方々から、まちづくりの現状を肌で感じる事ができたとの声を耳にし、担当者としてはほっとしております。「ともに歩き、ともに感じる、考える」ことができる時間的ゆとりが欲しかったというのは、欲張りでしょうか。

もともと女性の少ない都市計画分野では有りますが、昨今のまちづくりへの女性の参画にはめざましいものがあります。今後UIFAの活動においても、建築からまちづくり、都市計画への広がりを持てるような、あるいはその架け橋となれるようなあり方を期待しています。（大妻女子大学社会情報学部助教授）

マリアンヌの始末

北本美江子

専門は都市計画で建築家ではありません。空間をとらえるスケールが大きくて雑駁、関わる人間も多い分野ですが、日本大会をご縁に入会しました。ちょうど「女性プランナーの会」を作ろうとしてUIFAのことを知ったのですが、その昔、大学を紅一点で過ごして以来、「女性」であることを考える機会は多い方だと思います。

イメージとして「女性」が思い浮かぶ姿が二つあります。一つは百フラン札にもなっているドラクロアの絵で、「自由・博愛・平等」の旗を掲げて群衆の先頭を進む、半裸のマリアンヌ像です。

もう一つは「映像の20世紀」というテレビ番組で見たのですが、終戦後、強制収容所の死体を片付けていたドイツの女性達の姿です。

私は仕事の上でこれまでコーポラティブ住宅、再開発、マンション分譲、近代都市計画史（特にフランス）などに関わってきましたが、家庭生活の比重が結構大きく、ゴミの始末や子どもの教育の実感から、そんな女性像の印象が強いのだと思います。仕事の方も人寄せパンダ的なことや、男性の補助的に内部コミュニケーションの役割を負うことが多かったように思いますが、元気がなくなっている日本の男性社会のこれからを考えると、UIFA JAPONにはマリアンヌと後始末が一体となった、両方を貫く現実感が求められているように思います。

(都市住生活アトリエ)

「質問」

山本典子

UIFA日本大会から初めて参加しました。仕事が抜けられず、飛び飛びの参加でしたが、多くの方々と話すことが出来ました。



そうした時に必ず聞かれたのは、日本の大学建築科の女性の占める割合でした。『私の知る限り、全体の20%~30%が女性です。』と答えると『少ない』という返事が主でした。「それでは、あなたの国ではどうですか?」と聞き返します。

旧共産圏の国は男女半分ずつが主でした。入学定員の半数は女性にするきまりがあるとのこと。

一方、オーストラリアの人に聞くと「大学では半分は女性。人気のある学科だから。けれど……。」卒業しても専門職につく女性は少ないといえます。「都会で、子どもの面倒を見てくれる人がいるラッキーな人だけが建築を続けられるの。」「保育園も地方では少ないし、何より政府が女性が働くことの後押しをしてくれない。」

女性が建築を続けることの難しさはどうやら他の国でも同じようです。さよならパーティーで「あなたは昼間のツアーで居なかったけれど、何をしていましたか?」という質問に「普段働いていて出来ない家の掃除と1週間分の料理の材料を買っていました。」と答えると「私も家にいたら同じ事をしているわ。」とスウェーデンの人が笑いました。私のUIFA大会と日常生活を行き来した1週間は、思い出を残してこの様に終わりました。

(㈱宅地開発研究所企画開発室)

3つの大きな感動

三上紀子

この度、UIFA第12回日本大会への参加を機にUIFA JAPONに入会させていただきました。そして7日間にわたる大会への参加は、〈3つの大きな感動〉を私に与えてくれました。



まず1つめは、各国の女性建築家が、各ポジションにおいて積極的に建築と関わり、提言を行い、実践しているという事実でした。社会の中において、女性からの視点ということがよく言われますが、特に女性という立場にこだわることなく本当に自然体で一人の専門家として活躍されている姿をリアルタイムで拝見できたことは、私にとって大きな勇気となりました。2つめは、本大会のテーマ「環境共生時代の人・建築・都市」について、大会期間中じっくりと考える機会を与えられたことです。連日にわたる世界中からの発表の拝聴の中で、普段業務に追われる多忙な日々の中では体験できない多くの問いかけができたことはとても価値あることでした。そして3つめは何といっても世界31ヶ国 300名に及ぶ女性建築家の方々との出会いです。そのエネルギーで優しくヒューマニズム溢れるお人柄は、今後女性として私の目標と憧れになることでしょう。

夏期休暇の代替に取得した休暇を利用して参加したUIFA第12回大会の一週間。今、思い起こすと、連日の行事に圧倒されつつ感動の連続で、まるで長い旅をしてきたような気持ちでいっぱいです。今後は、UIFAの一員として、常にグローバルな視点で問題意識を持ち、3年後の大会への参加を目標に日々励んでいきたいと思えます。

(レジオンデザイン一級建築士事務所)

大勢の仲間とともに

永島恵子

多くの方々からのお誘いを受けて、今の自分の状況では外国での参加は難しいけれど、日本で開催されるのならUIFA大会に参加することを決めた。

一方私は、昨年度発足した、だれもが安全で安心して暮らせるようなまちづくりを目指す「安全・安心まちづくり女性フォーラム」に実行委員としてかかわっており、実際に発展的で楽しい活動でありながら、都市において本質的に重要で、先ず自らが取り組む必要性が高い事柄であると感じていた。そこでUIFA大会の論文の発表を「安全・安心まちづくり」をテーマに行うことと決め、東京都と北区の女性技術職員を中心とした、「安全・安心まちづくりUIFAの会」を総勢18名で結成し発表を行った。

論文の発表を担当するチームと、「安全・安心まちづくりプランニングノート」を翻訳するチームの2つに分かれて、半年以上前から本格的に活動を開始した。メンバーそれぞれが異なった部署で仕事をしており、また子育て真っ最中であったり、仕事が非常に忙しいポストである等、18名の足並みをそろえて準備を進めるには厳しい状況であったが、メールの交換とニュースレターの発行で、大きな成果を上げることができた。

心から大会関係者の皆様方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(東京都北区建築課長)

知識と知恵と行動を

座間智子

地球の歴史から考えれば、本当に短い期間に、環境は破壊されています。そしてそれは、これからの長い時間と、地球規模の大きな空間に、影響を与え続けてゆくでしょう。その様な時代の、人と環境・建築と環境・都市と環境の新しい調和関係を模索して行こうという今回の大会に参加して、色々な国の現状や、様々な共生の在り方を知る事ができました。UIFAは、国際的な組織であり、何か問題提起をした時に様々な視点からの意見や協力が得られるので、広い視野を持った解決策をみいだす事が出来ると思います。

今回の大会で提起された問題点を、組織で、また同時に個人個人で考えることにより、今回の大会が有意義なものになると思います。また、今回の大会で環境共生を、21世紀における新しい調和関係を模索した成果を、幅広く人々に伝えることにより、無関心に関心や知識を与えることが出来るかも知れません。国際的な組織であるUIFAは地球規模の環境問題に、知識と知恵と行動力を持って、これからも取り組み、21世紀の環境を整えてゆけると思います。

良い出会いの広がり

寺本晰子

旧ソ連邦のタシケントからサマルカンドは、私が古く70年に訪ねた土地で、W杯予選のTV中継に写った風景から、かつて訪ねた市場のにぎわいを思い出しました。もとは高校生時代に読んだ故井上靖氏の描くシルクロードと建築史に学んだ世界が重なって出かけたのですが、途中で垣間見た風土とタイルの剥離した青いモスクに出会い感激し歩きまわりました。旅では、私たちと良く似た顔付きの土地の人から何故かシャンパンを頂いたり、そのころ若く貧乏でしたが、『絹の道』では人との交流、思い出がありました。



そして'98大会でもまた、さまざまな国の方々と交流する機会を得ました。国が違うと国情も違い、〈アルゼンチンのセツルメント活動〉の話や、財産が違う〈モンゴルでは羊に牛に……と数え、ゴビ砂漠の恐竜のミュージアムを設計中とか〉など話を聞き、良い経験と出会いになりました。国際大会という場で、人やその地の風土の問題と知り合い、グローバルな目で建築や環境を知る事にもなりました。また楽しみが広がりました。(株)マ7・キクナーオイス

■ 新シリーズ
この指とまれ

「クロアチア」からのメッセージ ー翻訳に挑戦してみませんかー

昨年の10月、日本大会にも出席していたしていたクロアチアの Sena Seklic さんから全 355ページのものが送られてきました。タイトルはクロアチア語なのでよくわかりませんが、「建築における女性」というようなものらしく、女性建築家の歴史についての内容のようです。

原文はクロアチア語で書かれていますが、英文の訳も添えられていて、是非日本語に翻訳して欲しいとのメッセージが添えられていました。

目次は下記の通りです。

1. Amazones builders of towns
2. Semyramide's hanging gardens
3. Hatchepsut
4. The Out European cultures
5. Aegean and Antique Greek Seil
6. Etruria and Rome
7. Three great women architects of 4th, 5th and 6th C.
8. Preromanesque
9. The Romanesque
10. From Eleanor of Aquitaine to Isabella of Castille
The Gothic Period
11. Woman of the same education as man Renaissance and
Mannerism
12. Woman reform housing architecture Baroque and Rococco
13. The New Era
14. Proffessoinal education of women architects
15. UIFA
16. Eqilogue

興味のある方、私といっしょに翻訳に挑戦してみませんか。英語の勉強とお楽しみを兼ねて、ぼちぼちやりたいと思っていますので、東まで声をかけて下さい。集まる場所や、時間は未定です。

東由美子 事務所 TEL&FAX 03-3825-3985

自宅 TEL&FAX 03-3825-2959

■ 広報だより

1991年、新しい年の News letter 第1号をお届けします。

好評の中 '98 UIFA 日本大会を終え 報告書も作品集も完成しました。

1991年、UIFA JAPONをして貴女自身の新しいステージの始まり

何を考え、何をするか 大会で得られた糧、この限りなく広く大きい収穫を上手にそして有効に
使うこと期待しています。

担当：飯島、川嶋、渡辺、田中、大高、今村